



●阪急うめだ本店で開かれた「スークな乙女 蚤の市」。イギリスやアメリカのアンティークを扱う店●同百貨店にも出店している「sowgen brocante」の小泉さん。持っているのは船舶時計
＝いずれも大阪市北区で、小関勉撮影



▲「蚤の市」弘法市＝京都市南区の東区で、棚部秀行撮影



骨董の世界 気楽に手軽に

こっとうな男女 増殖中

由緒ある年代物の器や古美術品ではなく、ブランドや由来に限らない自分好みの古いモノに価値を見いだす人々がいる。「骨董」ではなく「こっとう」と書くカジュアルな楽しみ方。アンティークやビンテージとも似ているが、手軽さの点で少し異なる。「こっとう男子」「こっとう女子」なる言葉も生まれ、価値観の変化が起こっているようだ。大阪と京都の蚤の市、骨董市を訪ねた。【棚部秀行】

モノの物語

手にする喜び

百貨店で

阪急うめだ本店の10階催事場では、今月1日から7日まで「スークな乙女 蚤の市」が開かれた。スークとはアラビア語で「市場」の意味。古着や布、古い陶器、雑貨、アクセサリー、家具などが並び、雑多でレトロな市場の雰囲気を出している。1920年代のデンマークの船のおもちゃ、60年代の北欧の食器やカーテン、ミリタリーにアンティークを掛け合わせた古着など、ジャンルは書き尽くせないほど。値段も数百円から数万円の少々値の張る物まで。関西、関東から28店が出店し、ヨーロッパから買付けられた品物が目立った。同店によると、「蚤の市」

は5年ほど前から年2回開催。「各店長が選んだモノへの価値観」を買ったような動きが出てきました。限られた予算で楽しんで、勉強もできる。知る楽しみも得ることが出来ます」と担当者も魅力を説明する。ビンテージを眺めていた堺市の学生、高野綾香さん(21)は古いポストカードや写真、雑誌など、紙のよれや日焼け具合が好きだという。「1点モノで安価、質感や見た目がすごく魅力です。世界の蚤の市を回るのも好き」と話す。買い物中、たまたま立ち寄ったという大阪府河内長野市のアルパイト、追田知沙さん(28)は古着好き。モノに刻まれている時間や人のぬくもりが伝わります。いろんな人に渡った後、自分の所に来た

誰かのガラクタが誰かの宝物に

蚤の市で

関西の大きな骨董市、蚤の市としては、毎月21日の東寺(京都市南区)、四天王寺(大阪市天王寺区)、22日の四天王寺、25日の京都・北野天満宮(京都市上京区)の縁日などが有名だ。先月21日、JR京都駅近くの東寺を訪ねた。親しみを込めて「弘法さん」とも呼ばれる縁日市は、食べ物、屋台や植木屋、日用品の店も出て、来場者は多い月で20万人。1200以上の出店数を誇る。

「まだ日も上がっていない早朝6時過ぎ。東寺に着くと、すでに露店の品物の陳列は終わりがけていた。懐」とは常連さんの言葉。一仕事終えた和やかなムードが漂っている。売られているのは、朝鮮王朝(李朝)の器や古伊万里から、誰の家にもありそうな小物や懐かしの玩具、割れた器、さびたくぎやネジ農具まで。「ガラクタ」にしか見えないものも含め、なんでもありだ。客はそれぞれを手に取り、各店主と話し込んでいる。京都に2店舗を構え、阪急うめだ本店にも出店する「Sowgen Brocante」(そうげんブロカント)の店主、小泉博さん(45)は、ひらがなの「こっとう」趣味をけん引する人物の一人。四天王寺などの骨董市にも午前4時から並んで品物を見定め、仕入れるという。小泉さんは「お客さんには、私が買った意味を伝えます。擦り減り具合とか、たった一つのモノが持つ物語を見てほしいですね」と期待を込め、「こっとう」が受け入れられる背景を「今あるものを振り返るのも大事だ、という風潮があるのではないのでしょうか。消費一辺倒ではなく、価値観や美意識の新しいさが求められている気がします」と語った。

世間の価値観より自分の感性で

著書に『京都 こっとうを買いに』がある編集者の沢田盾香子さんの話。骨董趣味とは違う流れが、1990年代後半から出てきました。決まった価値観ではなく、自分がいいと思うモノを味わう。古いモノを雑貨のように楽しむ傾向が定着しています。陶片を壁に掛けると現代アートのようなオブジェになるし、安くて明治時代のお皿にコンビニおにぎりを載せると、一気に世界が変わる。誰かのガラクタが誰かの宝物になる価値の変換が面白い。価値をずらす遊びでもあります。

バブルが終わった頃に20代だった男性は、セレクトショップで服を買った世代です。彼らが「こっとう男子」として自分の見立てとセンスを売るようになりました。若い人も、時間が表現する味わいに価値を見だし、モノが持つ物語を求めています。社会や文化が成熟してきたのだと考えています。

社会と文化 成熟してきた証し